草の根NGOの真髄

# １人の国際協力実践者の活動を通して

**本誌論説委員の木村亮氏が理事長を務める認定NPO法人道普請人は、2007年以来、「土のう」を用いてアフリカを中心とした開発途上国の道直しを支援してきた。このNGOを木村氏と共に立ち上げ、副理事長を務めた喜田清氏が、昨年11月、亡くなった。国際協力の現場に立ち続けた喜田氏の活動を振り返りつつ、草の根NGOの在り方について、木村氏が語る。**

## 飛行機に乗るため協力隊へ

昨年、私が最も尊敬する国際協力の師匠、喜田清さんが亡くなった。享年70歳、早すぎる死であった。

喜田さんは1947年、香川県高松市で生まれ、香川大学農学部の園芸学科を卒業した後、東京・築地の野菜卸売会社に就職した。友達と羽田空港にジェット機を見に行った時、制服姿のパイロットに憧れ、「タダで飛行機に乗りたい」と模索する中、青年海外協力隊のポスターを見つけたという。

その後、念願の飛行機に乗り、協力隊員としてタンザニアに派遣されたものの、英語ができず現地では「ミスター・パードン」と呼ばれた。一念発起し、中学の英語の教科書を丸暗記するまでサトウキビ畑の中で音読し、半年で国連の会議に出席し意見を言えるまでになった。３年間の隊員生活の後、高松市に戻ってからはスーパーに勤め、結婚後に花屋を開業した。

転機が訪れたのは1988年。香川大学の恩師から「ケニアの大学で園芸を教える人を探している」と電話がきた。その大学とは、日本が78年から無償資金協力や技術協力で支援していたジョモ・ケニヤッタ農工大学（JKUAT）だ。悩みつつも、喜田さんは国際協力機構（JICA）の長期専門家としてJKUATに行くことを決断。以来、ケニアでJICA専門家を2008年まで務めた。

ジョモ・ケニヤッタ農工大学設立25周年式典での喜田清さん

## 汗を流して相撲を取った人

喜田さんは、専門家でありながら草の根的にケニア人に接していた。土俵の外から批評したり、離れて相撲を取ったりするのではなく、彼らと四つに組んで汗を流して相撲を取っており、彼の周りには常にたくさんのケニア人がいた。現地政府からの評価も高く、ケニア農業省は２度も喜田さんを表彰している。

そんな喜田さんの専門家としての業績の一つは、JKUATの農場を切り盛りして実習中心の大学教育を推進し、多くの学生を世に送り出したことだ。さらに第２国研修というスキームを用いて、農村婦人を大学に迎え研修を実施するなど、現地にどっぷりと漬かり、ケニア人の気持ちを理解していたことも、特筆すべき点である。

また、2015年の第５回アフリカ開発会議（TICAD Ⅴ）で脚光を浴びた、市場志向型農業を振興するSHEP（Smallholder Horticulture Empowerment & Promotion）は、もともと喜田さんが推進した「農民組織化」と「マーケティング」を基礎にして、そこに筆者が「簡便農村インフラ整備」を付加し計画・実施したものである。が、そのことを知る人は少ない。

ただし喜田さんは、JICAが期待するプロジェクト計画書の立案や書類作成、予算管理や最終報告会での発表など、報告書や口頭発表の「形だけの実績の表現」には長けていなかった。20年のうちの最後の数年間は、「お役所仕事に従事する専門家」に相当嫌気を感じていた。

## 活動は国連プロジェクトに発展

専門家を経て、喜田さんが道普請人の副理事長兼その支店であるCORE　KENYAの代表となったのは、2009年のことだ。戦略と戦術を考え経営的な感覚でNGOを動かす筆者と、現地で具体的な活動をケニア人と共に実施する喜田さん、そしていったん社会に出た後に博士課程で勉強し、細かい作業を粘り強く実施できる若い福林良典君を理事に迎え、３人４脚の活動が始まった。

「土のう」による道直し訓練活動は草の根レベルから始まったものの、３年５カ月を経て、ケニアの国際労働機関（ILO）プロジェクトとして取り上げられた。さらに、ソマリアやガンビアへも活動は広がり、国連人間居住計画（UN-HABITAT）のケニア・カクマ難民キャンプの活動や国連開発計画（UNDP）のケニアプロジェクトにも発展した。

現地に入り込む中で、日本の大使館や外務省からも「途上国政府から資金を引き出し、他のNGOにも道直しを教える活動をやってほしい」と要請が来るようになった。そこで始めたのが、ケニアで道直し訓練を受けた研修生を国内の道路整備研修所に送り込み、２カ月の座学と実学を受けさせる研修だ。年3,000万円程の研修料はケニア政府が出している。研修生はその後、アスファルト舗装やコンクリート舗装を計画・実施する技術者に育ち、小さな建設会社を多くの者が起業している。さらに、土のうによる道直しはケニア公共事業省のマニュアルにも掲載された。これらが実現したのは、現地で人脈と信頼を積み上げた喜田さんのなせる業である。詳しくは、喜田さんのブログ「サバンナの風」を読んでいただきたい。；https://ameblo.jp/kenyadiary/

## 共にアフリカで活動

私と喜田さんの関係は、1993年10月、私が初めてJKUATの短期専門家として赴任した時に始まる。一回りも年齢が上である彼となぜか気が合い、多くの時間をアフリカ談義に費やした。

ところが昨年４月、喜田さんは体調を崩し、日本に帰国した。「長期は無理でも１年のうち数カ月ケニアで活動してほしい」との私の願いも叶わず、最後はホスピス緩和ケア施設で過ごされた。だが緩和ケア施設に入ったとたん元気になり、いったん退所させられたのは、彼らしい一面である。

昨年10月に会った時には、「木村先生とアフリカの大地を走り回れたことを誇りに思っている。楽しかった」と言われた。「11月22日に焼き牡蠣を食べに行きましょう」とも約束したが、その日が喜田さんのお葬式の日となってしまった。

## 遺志を継ぐために

喜田さんのような草の根国際協力の実施者を育てるには、現場に放り出し、その国を好きになってもらうのが一番だ。こうした後継者の育成は、NGOが組織として発展するために必要な３つの条件のうちの一つでもある。この条件については本誌2017年３月号でも論じたが、残りの二つは「活動方針がぶれない」と「経営者意識を持つ」である。

さらに、NGOを運営する上では資金調達も重要な課題だ。国際協力に長年従事している人は「資金の活用」に長けても、えてして「資金を生み出す術」には疎い。そこで道普請人では、各支店とも独立採算で組織を運営するようにしている。日本の本店と連結させるのでなく、崖っぷちに立たせることで自ら資金を集めるよう鼓舞しているのだ。そうした中で、道普請人の活動予算は約10年の間に50倍以上に増えた。今後も喜田さんの遺志を継ぎ、道普請人の運営を通じてアフリカ人と真剣に相撲を取っていきたいと思う。

合掌。

京都大学大学院 工学研究科 教授
（特活）道普請人 理事長
**木村 亮**氏

京都大学大学院工学研究科修士課程修了。京都大学助手・助教授を経て、2006年より同大学国際融合創造センター教授、2010年より工学研究科教授。07年、土のうを使った開発途上国の道路整備を行う（特活）道普請人を設立し、その理事長を務める